

第 65 回 国際東方学会議・東京会議シンポジウム
平安朝漢文学における散文の諸相

平安朝における白居易「策林」の受容

都留文科大学 長瀬由美

平安時代に成立した勅撰私撰の漢詩文集はもとより、たとえば『宇津保物語』や『蜻蛉日記』『源氏物語』などの仮名作品を見わたしてもすぐ気づかされるように、平安時代の文学、すなわちこの時代の表現と思想とを大きく担っていたのは、大学寮出身者およびその子女たちであった。平安時代には、大学寮を拠点として唐に倣うかたちで学問がなされた。儒教の経典を軸に、史書や『文選』が大学寮の教科書に指定され、用いられる注釈書も基本的に唐に倣ったが、加えて承和年間以降白居易の詩文集『白氏文集』が伝来されるや、大学寮の教科書群とは別におおいに重んじられ、詩作の範とされ、かつ官僚の行政文書としても範とされた。

しかし、とりわけ大きな影響を与えたこの『白氏文集』の受容については、つとに太田次男氏が問題提起したように（「白居易及びその詩文の受容を繞って」）、現在その影響の研究は詩に偏っており、文がほとんど対象とされておらず、白居易の文人官僚としての側面が無視されているという状況にある。太田氏は一例として、平安中期に明法家これむねのただすけ惟宗允亮によって編まれた『政事要略』が「策林」など白氏の文を載せていることに注目し、政治時務に関する白氏の文が、平安時代の一部の知識人に尊重され読みこまれていた事実を指摘した。この白居易「策林」を重視する姿勢は、鎌倉時代成立の『白氏文集』選抄本『管見抄』が「策林」全篇を抄出するように、後の時代に受け継がれていく。

本発表では、白居易「策林」が平安朝漢詩文にいかにかに受容されているかという問題を取りあげ、白氏「策林」の精神が日本的な変容をして平安朝に組み込まれてゆく様相についても考察したい。